

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 認知言語学的な観点から見た日本語の「完了」アスペクトの形式

氏 名 许临扬

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、寺村(1984)の形態論による一次的、二次的、三次的アスペクトの分類の意義が意味の観点から示された。二次的アスペクト形式「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」が表す「完了」の意味特徴を考察することによって、二次的アスペクトが表す「完了」は、ズームアウトし、全体を捉え、更に隣接する時空間も視野に入れる特徴を持つことを明らかにした。そして、三次的アスペクト形式「～切る」、「～抜く」、「～通す」が表す「完了」の意味特徴を考察することによって、三次的アスペクトが表す「完了」は、ズームインし、最終部分の境界線に焦点を当てる特徴を持つことを明らかにした。そして、「継続」の概念に対立し、一次的アスペクト形式「る」形が表す「完了」、すなわち、出来事をひとまとまりに捉えるという意味特徴を持つ「る」形が、二次的アスペクト、そして三次的アスペクトが表す「完了」と異なることを明らかにした。本研究における以上の分析結果は、なぜ日本語には一次的アスペクト形式があり、そして、二次的アスペクト形式もあり、さらに、三次的アスペクト形式まであるのかという問いに対する答えを見出すことができ、日本語のアスペクト形式を統一的、体系的に研究するのに意義がある。

本研究は、「完了」の意味特徴をめぐって、認知言語学的な観点から日本語のアスペクト形式を研究するものである。現代日本語のアスペクト研究に関して、鈴木(1957)をはじめ、奥田(1977)、工藤(1995)、などは「完成相」を表す「スル」(シタ)と「継続相」を表す「シテイル」(シテイタ)の対立を日本語の形態論的なカテゴリーのアスペクトとして規定し、「-てしまう」のようなテ形補助動詞や、「～切る」のような複合動詞などを機能・意味のカテゴリーとしてのアスペクチュアリティの中で扱っている。こうした立場とは異なり、寺村(1984)は日本語のアスペクトを一次的アスペクト、二次的アスペクト、三次的アスペクトに分け、「する」を「未然」を表す形とし、「した」を「已然」を表す形とし、一次的アスペクトとして両者を対立させている。そして、奥田(1977)や工藤(1995)などが排除した「-てしまう」のようなテ形補助動詞を「-ている」と同列に扱い、文法形式化した二次的アスペクトと規定し、更に「～切る」のような複合動詞を三次的アスペクトとしている。このように、「完了」か「継続」かの対立を中心とする「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違」(工藤 1995: p.8)を表すア

スペクトルについて、現代日本語において、基本的な規定から体系的な捉え方まで意見が分かれている。そこで、本研究は、「完了」の意味特徴を中心に、寺村(1984)が形態論の観点から分類した一次的、二次的、三次的アスペクトが意味の観点から見ると、それぞれどのような「完了」の意味特徴を持っているのかを検討した。具体的には、第1に、二次的アスペクト形式の中から「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」を取り上げ、意味分析と意味比較を行った。第2に、三次的アスペクト形式の中から「～切る」、「～抜く」、「～通す」を取り上げ、意味分析と意味比較を行った。第3に、第1と第2で分析した6つの形式が表す「完了」の意味特徴を、一次的アスペクトの「する」が表す「完了」の意味特徴と比較し、その共通点と相違点を考察した。

第1章では、まず、現代日本語のアスペクト研究を概観し、先行研究で言及している様々な「完了」の意味をまとめた上で、本研究における「完了」の意味を認知言語学的な観点から定義する。次に、寺村(1984)の形態論の観点から分類した一次的、二次的、三次的アスペクトを本研究が定義した「完了」の意味に基づき、体系的に捉え直す。最後に、本研究の研究対象となる6つの形式、すわなち、補助動詞の「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」及び複合動詞の「～切る」、「～抜く」、「～通す」をその体系の中に位置づけ、本研究の全体像を提示する。

第2章では、まず、研究対象となる二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」、そして、三次的アスペクトの「～切る」、「～抜く」、「～通す」に関する先行研究の中で代表的なものを取り上げ、概観する。次に、本研究の研究目的から見た場合に、研究対象となる6つの形式にどのような問題点があるのかを提起し、研究方法を述べる。

第3章では、本研究に関する理論的背景を簡潔に紹介する。具体的には、認知言語学と認知意味論、多義語と意味拡張に関するメタファー、メトニミー、シネクドキーの3種類の比喩及び概念メタファー、そして、最後に文法化を紹介する。

第4章では、まず先行研究で論じられている「-ている」の用法を中心に述べていく。「進行」を表す「-ている」は、出来事の部分に焦点をあて、ひとまとまり性を持ち、「完了」を表す「する」と対立している。一方、「結果状態」を表す「-ている」は、「完了」をベースにした「結果状態」を表す二次的アスペクト形式「-てある」と緊密な関係があり、「過去に実現したことの結果として現在の状態を述べる」(寺村 1984: p.147)との意味から、「-ている」には二次的アスペクトの特徴も見られる。次に、「結果状態」の意味において、「-ている」と相補的な関係にある「-てある」は、ムード的な「準備」の意味において、「-ておく」との類似性が見られる。そこで、「-ておく」と「-てある」はそれぞれどのような「完了」、そして、どのような「準備」の意味を表すかを明らかにするため、認知言語学的な意味関連の観点から「-ておく」の意味分析を行った。「場を占める」という「置く」の実空間における具体的な意味から、「-ておく」の抽象的な拡張義への繋がりを検討し、「持続」や「準備」などの用法をすべて「場を占める」という意味で統一的に説明できた。それを踏まえ、「-てある」の意味との比較を行い、「-てある」と「-ておく」は前接動詞の出来事をまるごと捉え、更に隣接する時空間を視野に入れる点が共通しているものの、区切られた時空間の関わり方の違いが原因となって、両者が表す「準備」の意味が異なる。続いて、テ形に接続する補助動詞の中で「完了」を表すと言われている「-てしまう」がどのような「完了」の意味を表すのかについても考察した。考察に当たって、本研究では「-てしまう」が表す「完了」の意味特徴を①～③にまとめた。①事態の内部構造に入ることがなく、外側からの視点で事態をまるごと捉える。②事態実現の境界線に焦点を当てる。③事態は実現する前の状態を視野に入れ、実現した後の状態との対比の中で事態の「実現」

を述べる。以上の考察を通して、次のようなことを明らかにした。「る」形の一次的アスペクトの「完了」は「継続」の概念に対立するものであり、出来事をひとまとまりに捉えるという「完了」の意味を表す。そして、テ形で接続する二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」は、ズームアウトし、出来事全体を捉える「完了」として、一次的アスペクトの「る」形と共通している。一方、これらの形式は出来事が「完了」なのか「継続」なのかに焦点が当たっておらず、出来事の「完了」をベースに隣接する時空間の出来事との関係を視野に入れる点が一次的アスペクトと異なる。更に、隣接する時空間の出来事との関係に焦点が当たっているがゆえに、二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」には「準備」や「マイナス評価」などのムード的な意味を伴うと考えられる。最後に、これらの二次的アスペクト形式「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」と中国語との対照を行った。対照を通して、日本語の二次的アスペクトが表す「完了」、すなわち、ズームアウトし、全体を捉え、更に隣接する時空間を視野に入れるという特徴を持つ「完了」の捉え方は中国語では言語化しにくいことを明らかにした。

第5章では、先行研究で「完了」を表す形式として扱われている複合動詞の「～切る」、「～抜く」、「～通す」は、どのような「完了」の意味を表すのかという点をめぐって、意味分析と意味比較を行った。まず、最初に「～切る」の意味分析を行った。「モノの切断」という基本的な意味を持つ「～切る」の「動作の完遂」というアスペクトの意味への変容は、一足飛びに起こるのではなく、その中間に変化動詞と結合する「～切る」の用法が存在する。変化動詞と結合する「～切る」から動作動詞と結合する「～切る」への意味拡張の中で「変化スケール」が注目され、橋渡しの働きをしている。つまり、動作動詞は目的語と共起することによって獲得した動作対象の「変化スケール」に注目することによって、動作対象がゼロになった時点が、動作の完了時点となる、というのが「～切る」の表す「完了」の意味である。次に、「～抜く」の意味分析を行った。「～抜く」の意味分析では、「～抜く」の基本的意味を「拔出」と「貫通」の2種類に分け、「貫通」の意味は空間での抽象化を起こし、「目標物を追い抜く動き」の意味に変容する。そして、更に時間にも拡張し、「目標実現の追求」というアスペクトの意味と結びつく。「目標実現の追求」とは目標に向かって、時間の流れの中で、段階的な動作の実現という意味であり、これが「～抜く」が表す「完了」の意味特徴と考える。続いて、「～切る」、「～抜く」、「～通す」の意味比較を行った。三者の意味比較を行う前に、「～通す」が表す「完了」の意味特徴を検討した。「～通す」は「～切る」、そして「～抜く」と異なり、始点から完了時点までの動作の過程そのものに注目する特徴を持っている。このように、「～切る」、「～抜く」、「～通す」は「完了」という意味においては同様だが、完了時点に至るまでのプロセスにおける焦点の当て方によって、「～切る」、「～抜く」、「～通す」が表す「完了」の意味合いに違いが出てくる。そして、「完了時点に至るまでのプロセスの違い」という特徴がズームインし、最終部分の境界線に焦点を当てる「完了」であり、「ズームアウトし、出来事を全体として捉える」一次的、二次的完了アスペクト形式との違いが明らかである。以上の考察を踏まえ、最後に「～切る」、「～抜く」、「～通す」と中国語との対照を行い、日本語は完了時点とそこに至るまでのプロセスに注目する特徴を持っているのに対して、中国語はその両方を同時に言語化することが難しいことを明らかにした。